

アメリカ生命倫理学に対するメタ分析的、かつ歴史的な研究

Meta-analytical and Historical Research on American Bioethics

研究代表者 東京大学大学院教育学研究科

教授 金森 修

Osamu KANAMORI, Professor, Graduate School of Education, The University of Tokyo

共同研究者：市野川容孝、香川知晶、小松美彦、田中智彦、土井健司、中島理暁、廣野喜幸(Yasutaka ICHINOKAWA, Chiaki KAGAWA, Yoshihiko KOMATSU, Tomohiko TANAKA, Kenji DOI, Masaaki NAKASHIIMA, and Yoshiyuki HIRONO)

和文アブストラクト

アメリカを中心として形成された生命倫理学は一定の普遍妥当性をもつように見える。だが、そこにはアメリカ社会に特有の思想や文化が反映されている可能性がある。そこで、本研究は歴史的観点からアメリカ生命倫理学のメタ分析を試みるとともに、ドイツや日本との比較を通じて、その相対化を図った。その結果、自己決定、倫理委員会、尊厳ある生の基準等の生命倫理学の基礎原理自体が、歴史的、社会的に彫琢された、固有の限界を抱えたものだということを示した。

Abstract

American bioethics seems to have a certain degree of universality. It is, however, highly likely to reflect American ethos. Through conducting meta-analysis of American bioethics from historical perspective in comparison to Germany and Japan, its fundamentals, such as patient's autonomy, ethics committees and the definition of death with dignity, turned out to be constrained profoundly by sociocultural determinants and have the limitations for its universality.

1 研究目的

生命倫理学 (bioethics) は 1970 年にアメリカの癌学者ポッターが初めて提唱した学問だ。だがポッターは、今で言うなら環境倫理学と生命倫理学の或る種の成分とを総合したような、構想力の大きな学問をもととは念頭に置いていた。だが、その後、生命倫理学は、環境倫理的成分にはほとんど関わらず、専ら医療や医学の同時代的問題に関わる領域として、70年代以降急速に展開していくことになった。特に69年に創られたヘイスティングス・センターや71年に創られたジョージタウン大学・ケネディ研究所は、この学問に制度的基盤を与えた。話題は、脳死・臓器移植、出生前診断や選択的中絶などの生殖医療問題、安楽死・慈悲殺問題などの難問ばかりであり、

それらについて多くの業績が積み重ねられてきている。また近年ではヒトゲノム計画に関連する新優生学問題、ES細胞などの再生医療問題が浮上してきている。生命倫理学は、このような現代医学が引き起こす倫理的、社会的、哲学的問題群の解決を目的としたものだといえる。

しかし、生命倫理学は、歴史的に見て、アメリカ社会で成立したということのために、アメリカ社会に特有な思想的、文化的拘束を受けている可能性がある。だがそれは、まだ十分には反省されていない。訴訟社会的側面からくる或る種の議論のたてかた、また、調整的性格を持たざるを得ない局面での議論の收拾の仕方などに、アメリカ的な功利主義やプラグマティズム的特性が垣間見える。その

思想的傾向が、個別具体的な判断や社会政策にひとえに反映するとなると、看過しておくわけにはいかない。このような問題意識にたち、アメリカ生命倫理学の特性と限界を見極め、日本はそれに対してどのような対応をすれば最も適切なのかを、歴史的、哲学的に反省することがこの研究の目標である。

2 研究経過

原則的には、年に3,4回のペースで研究会を開いた。日産の研究助成金は2003年度から給付されたが、2002年度からわれわれは準備作業に取りかかっていた。最初の数回はグループ以外のゲストを招き、現状での問題点を報告していただいた。そして次に、グループ構成員が、各自の問題設定をテーマにそれぞれ一回ずつ研究会を開き、批判を仰いだ。それが、研究の第1段階になる。その過程で、香川知晶の『生命倫理の成立』(2000)や、小松美彦の『脳死・臓器移植の本当の話』(2004)に対する合評会を行ったということを明記しておく。その作業を基盤にして、各自が文献・資料分析を深める段階を第2段階とした。

その成果を通して、岩波書店の『思想』にわれわれのグループだけからなる特集号を計画していたため、2005年5月に、そのための合宿を行い、そこで各自の論文に対する徹底的な議論を行った。そして同年9月、メタバイオエシックスの特集号を無事に刊行することができた。それは、さまざまな所からの高い評価を得た(例えば『応用倫理学研究』第3号等)。また、それ以外にも各自がこの時期での研究成果を多くの本や論文の形で公表し、現在に至っている。

3 研究成果

この研究期間中、金森修は主に二つの主題についての追及を行った。第一に、死や臨死について、アメリカの第二次世界大戦後の重要な事件や判例によりながら分析した。第二

に、90年代以降、ヒトゲノム計画を背景に浮上した特殊な優生思想、いわゆる新優生学に対する分析である。それはヒトの生殖系列を遺伝的に改変するという近未来的な話題にも関わり、その文化的射程は極めて大きい。

市野川容孝は、ヨーロッパにも視野を広げ、主にドイツの医療政策について分析を行った。特に歴史的視点を重視し、医療プロフェッションの自律性が第一次世界大戦を契機として徐々に弱まり、ナチス期の強制的同質化の時期に消滅していく過程を分析した。

香川知晶は、脳死・臓器移植問題がアメリカで焦点化される最初の時期に着目し、それぞれ別個に展開されてきた臓器移植技術と、不可逆的昏睡概念が合体することで、脳死・臓器移植という問題が形成されていったということを示した。小松美彦も、香川同様、脳死・臓器移植を集中的に取り上げた。80年代初頭の大統領委員会報告書が、ハーバード基準を超克し、脳死を人の死とする科学的論理を構築したものだということを確認した。だが、90年代後半以降、その内容に科学的破綻が生じつつあることに注目した。

田中智彦は、80年代以降に始まる日本での生命倫理学の受容過程を主題的に取り上げた。その過程で、それに先立つ60年代から80年代初頭にかけての動向を見据えることの重要性を指摘した。具体的には70年代のライフサイエンス論、80年代の生命倫理懇談会がもっていた歴史的重要性を明らかにした。

土井健司は、アメリカ生命倫理学が宗教性を脱色する仕方で展開しつつあることを批判的に回顧した。そしてヒト胚研究に焦点をあてて、人間の尊厳概念を内在的ではなく、関係的に基礎づけ、『ペトロの黙示録』のテキストによりつつ、神学的眼差し論から妊娠中絶容認の可能性を論じた。

中島理暁は、生命倫理学の制度的根幹を成す機関内審査委員会(IRB)および病院倫理委員会(HEC)を巡る肯定的な支配的言説の

妥当性に疑問を投げかけ、新たな歴史像の提示を試みた。

廣野喜幸は生命倫理学がごく初期に周辺化してしまった環境倫理学の独自の重要性に配意し、動物の権利論に焦点をあてた分析を行った。そして、生命倫理学の中で自己決定原則が重視される過程で、自己決定の主体にはしにくい動物や環境が排除されていったという可能性を示唆した。

4 今後の課題と発展

本研究によって、アメリカの生命倫理学の成立過程を再検討する試みは確実に緒についたといえる。ただし、その検討は対象が現在に直結する歴史であることもあり、現象論的な整理に主に力を注ぐ段階にとどまってきた嫌いがある。今後は、そうした歴史的な基盤を出発点にして、より明確な形でアメリカの生命倫理学の背景にある文化的拘束を剔抉し、その特性と限界を批判的に考察することが課題である。そのためには、事象に対する哲学的分析を深めるとともに、すでに開始されている他の地域、すなわち、日本やヨーロッパなどの場合との対比を念頭に置く、より広い視野に立つ考察が必要となる。

また個別具体的にはそれぞれの研究者がこの期間に取り上げた主題を、拡大し、敷衍していくという作業は、今後当然重要になる。例えば人間の尊厳論の一層の掘り下げ、日本での受容過程へのより繊細な眼差し、再生医療など先端医療に関するより詳細な調査と検討などの問題群である。

また、遺伝子工学などの科学技術はもとより、生命倫理学という知のあり方そのものを、フーコーの「生・権力」論などの視点から捉え直すことも必要になるはずだ。その視点を入れることによって、単に思想的位相での分析をするだけでなく、より知識政治学的観点からの生命倫理学の分析が可能になる。そうすれば、成立期での環境問題や人口問題などが、

なぜ徐々に周辺化され、生命倫理学といえば、専ら医療倫理のことを意味するようになったのかなどの重要な問題点に光が当てられることになるはずである。

5 発表論文リスト

- [1] 金森修：リベラル新優生学と設計的生命観、現代思想, vol.31, no.9, pp.180-202(2003).
- [2] Osamu Kanamori, Philosophy of Genetic Life Designing, *Jahrbuch fuer Bildungs-und Erziehungsphilosophie*, vol.5, pp.59-81(2003).
- [3] Osamu Kanamori, Cultural Attendance on Homo Geneticus, *Journal of International Biotechnology Law*, vol.2, no.1, pp.34-40(2005).
- [4] 金森修：設計の自己反射・離陸する身体, 現代思想, vol.33, no.8, pp.99-113(2005).
- [5] 金森修：生命倫理学?? ヤヌスの肖像, 思想, no.977, pp.170-186(2005).
- [6] Osamu Kanamori, Lingering Dawn of Homo Transgeneticus, *Journal of ELSI Studies*, vol.3, no.2, pp.1-19(2005).
- [7] 金森修：『遺伝子改造』勁草書房, pp.i-xiii, i-xv + pp.1-323 (2005) .
- [8] 市野川容孝：人体実験と近代医学の成長 19世紀のドイツ医学, 武藤浩史・樽沼範久編著『運動+(反)成長』慶應義塾大学出版会, pp.22-47 (2003) .
- [9] 市野川容孝：パーソンズと医療社会学, 富永健一・徳安彰(編)『パーソンズ・ルネッサンスへの招待』勁草書房, pp.77-88 (2004) .
- [10] 市野川容孝：社会的なものと医療, 現代思想, vol.32, no.14, pp. 98-125 (2004) .
- [11] 市野川容孝：脳死と臓器移植の歴史社会学的考察, 法社会学, 第62号, pp. 1-18 (2004) .
- [12] 市野川容孝：ドイツにおける医療倫理と医療プロフェッション, 思想, no.977, pp. 109-136 (2005) .
- [13] 香川知晶：『いのちの倫理学』(共著)コロナ社, pp.71-96(2004).
- [14] 香川知晶：人体実験の現在 欧州共同体指

- 令とフランス被験者保護法の改正 , 情況, vol.305, no.4, pp.108-121 (2004).
- [15] 香川知晶: 米国の生命倫理: その歴史をめぐる基本文献, 平成 15・16・17 年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(1), 課題番号 15320008、平成 15 年度研究成果報告書, pp.49-55(2004).
- [16] 香川知晶: 『ケアの社会倫理学 医療・看護・介護・教育をつなぐ』(共著)有斐閣, pp.281-305(2005).
- [17] 香川知晶: 「新しい死の基準」の誕生 臓器移植と脳死、その結合と分離 , 思想, no.977, pp.6-23 (2005).
- [18] 香川知晶: 『生命倫理 21 世紀のグローバル・バイオエシックス』(共著)北樹出版, pp.10-22(2005).
- [19] 小松美彦: 『脳死・臓器移植の本当の話』P H P 研究所, pp.1-423(2004).
- [20] 小松美彦: 『自己決定権は幻想である』洋泉社, pp.1-222(2004).
- [21] 小松美彦: 脳死者は生きている—管理社会の中の先端医療, 現代思想, vol.32, no.14, pp.126-140(2004).
- [22] 小松美彦: 『生命の教養学へ—科学・感性・歴史』(共著)慶應義塾大学出版, pp.14-41(2005).
- [23] 小松美彦: 『宗教と生命倫理』(共編著)ナカニシヤ出版, pp.3-23(2005).
- [24] 小松美彦: 『脳死論議ふたたび』(共著)社会評論社, pp.151-172(2005).
- [25] 小松美彦: 「人体革命」の臨床哲学へ, 財団法人国際高等研究所報告書 0207 臨床哲学の可能性, pp.137-146(2005).
- [26] 小松美彦: 「有機的統合性」概念の戦略的導入とその破綻—脳死問題の歴史的・メタ科学的検討, 思想, no.977, pp.24-51(2005).
- [27] 田中智彦: 『応用倫理学講義 1 生命』(共著)岩波書店, pp.147-168 (2004).
- [28] Tomohiko Tanaka, The Welfare State and the Task of Bioethics: Rethinking Japanese Bioethics, *Bulletin of Liberal Arts and Sciences, Tokyo Medical and Dental University*, no.34, pp. 1-26 (2004).
- [29] 田中智彦: バイオエシックス導入に至る言説の諸類型—その「前史」からの問いかけ, 応用倫理学研究, no.2, pp.1-17 (2005).
- [30] 田中智彦: 「命のリレー」の果てに—日本へのバイオエシックス導入「前史」から, 思想, no.977, pp.137-153 (2005).
- [31] 土井健司: 『宗教と生命倫理』(共編著)ナカニシヤ出版, pp.55-83(2005).
- [32] 土井健司: ヒト胚研究と妊娠中絶の是非—神学的眼差し論の試み—, 思想, no.977, pp.154-169.
- [33] 土井健司: 関わりとしての「いのち」の思想—ニュッサのグレゴリオスにおける三つのテキストから—, 神学研究, 第 52 号, pp.13-21(2005).
- [34] 土井健司: 小さいいのちの「尊厳」に向かって, 福音と世界, 12 月号, pp.52-57(2004)
- [35] 土井健司: 脳死臓器移植とキリスト教—隣人愛としての臓器提供の問題性と脳死の是非—, 宗教法, 第 22 号, pp.167-184(2003).
- [36] 中島理暁: 倫理委員会の脱神話化, 思想, no. 977, pp. 88-108 (2005).
- [37] 中島理暁: 死にゆくブライアンを前にして: インフォームド・コンセントのレトリックと現実」(翻訳および解題) 思想, no. 977, pp. 65-87 (2005).
- [38] 廣野喜幸: 生命科学・バイオテクノロジー 100 年間の推移と未来展望, 渡邊格ほか 『21 世紀生命科学バイオテクノロジー最前線』東京教育情報センター, pp. 303 - 339(2003).
- [39] 廣野喜幸: ヒトゲノム計画が私たちの社会にとってもつ意味は何だろうか, 東京大学総合研究会編 『ゲノム』東京大学出版会, pp.29-56 (2003).
- [40] 廣野喜幸: [BSE]歴史的経緯, 科学, vol. 75, no. 1, pp. 56-59 (2004).
- [41] 廣野喜幸: 薬害エイズ問題の科学技術社会論的分析に向けて, 藤垣裕子編 『科学技術社会論の技法』東京大学出版会, pp. 75-99(2005).